

モラル・ハラスメントを許すな！⑮ 「堀江貴文日記」を読んで ～自分を探し続けた青年～

(1) 日記に現れた心の叫び

前回『法の“すれすれ(on the edge)”を駆け抜けたホリエモン』では、時代の流れの中に堀江氏を位置づけて考察した。今回は、堀江氏の内面について考察してみたい。

斜め読みした週刊誌に、堀江氏が小さくて細かったことが書かれていた。支配を受けている子どもが示すサインの一つだ。親は共働きで、父は企業戦士、母も厳しく、たとえ100点を取っても褒めなかったという。強力なトレーナーが生まれながらに2人いたような環境で、トレーニングに追われたことが推察された。

愛情は十分にもらったのだろうか…。気になった私は、「堀江貴文日記」を拾ってみた。長文のところ目に留める。すると、さっそく2004年1月に次のような記載があった。<『反響頂き第二段！100億稼ぐ仕事術の読者感想に思うこと2』(2004年01月17日) <http://blog.livedoor.jp/tekapon.ceo/archives/17012482.html>>

ここに、読者との質疑応答が記載されていた。気になった部分を転載する。

(■が読者からの意見)

<以下転載>

■「コスト削減のところや、人が去っていったところは、冷淡な感じがしたけど」

覆水盆にかえらず、といいますが、諸行無常の世の中、ずっと同じ人と一緒に仕事ができるわけありません。だれしもいつかは別れ

が来るのです。残酷ですが、それが現実です。死別するわけではないので、割り切りは大事でしょう。いつかは分かり合えるとおもいます。

■「一見普通に出来そうである……が、その持続が非常に難しいのではないかと」

んで、持続を簡単にする方法を補足します。短期で頑張って成功体験をひとつでもいから作ることです。短期というのは長くても数ヶ月。その間は、周りの人間関係すら崩壊させてもいいという覚悟で、取り組むこと。寝食を忘れて取り組むということわざがありますが、寝食を忘れること、食事は大事なので忘れないください。成功体験を一度でもつむと、快感が忘れられなくなるので、もう一度体験したくて、結果として持続するようです。

■「最後の1ページ、「諸行無常」の部分、個人的に良かったです」

変わらないものを探し出す事が結局、私の人生の最終目標なのかもしれません。今のところありそうにないですが、

<以上、転載終わり>

これを読まれた方はどう感じただろうか。私は、最後のコメントに叫びを感じた。

(2) 「変わらないもの」を求め続けた子ども

この世に生れ落ちた子どもにとって、この世と自分をつなぐ絆は親である。同時に、その親は癒しと回復を与えてくれる安全基地でもある。



親が、生れ落ちたあるがままの自分を認めてくれるから自分の存在に自信を持ち、帰ると受け入れてくれるところがあるから、安心して冒険の世界へと旅立つことができる。自分が生きていくために、この世で信じていることができる

『変わらないもの』

—それは、「無償の親の愛」なのだ。

自分は成長し変化していく。浮き沈みもあるだろう。だが、自分がどんなに変化し、どんな状態にあっても、親の自分に対する愛だけは“変わらない”。しかし、彼は、その『変わらないもの』をもらうことができなかった。この世に孤独に漂白する彼は、自分で『変わらないもの』を探さざるを得なかった。

そして、とりあえず見つけた

『変わらないもの』

—それが、「金」だったのではないだろうか。堀江氏の上記最初の回答は、親と自分との関係を示唆しているように私には思える。求めても得られなかった親との関係は『覆水盆にかえらず』、所詮この世は『諸行無常』と割り切って思いを封印するしかなかった。

もっとも血の濃い親子という人間関係でさえも『諸行無常』の中にあるのならば、自分とこの世のすべての関係は無常。

翻訳・通訳

3ヶ国語(日・英・中)
証書類翻訳も承ります。



Pavilion Translation Service (パビリオン翻訳部)

Tel: (847)-640-9676

E-mail: info@pavilion-america.com

パビリオン【グループ定期購読】

お友達・ご近所様、企業様へも、一緒にまとめて
お届け！みんなでパビリオンを読もう！

●下記、必要事項を別紙にご記入(またはE-mail)、チェック添付の上、下記宛先までお送り下さい。チェック受取り後、弊社よりE-mail(またはTEL)にてご連絡させていただきます。
※E-mail(またはTEL)ご連絡先を必ずお知らせ下さい！

■必要事項■

<選択> 20冊/12ヶ月購読希望(\$350) 40冊/12ヶ月購読希望(\$600)

<必須> Name(Company Name): / Address: / Zip: / TEL: / E-mail:

※お届け先は一ヶ所のみ、チェックお支払いもお一人様(代表者)のみでお願いします。

●月一回発行(毎月月末) ※米国内のみの発送
毎月20冊(計240冊)=\$350(お一人・年間\$17.50) ※小部数または40人以上の
毎月40冊(計480冊)=\$600(お一人・年間\$15) 大部数でも対応可能です。
別途、お問合わせください。

To: Pavilion Graphics, Inc. E-mail: pavilion@johoya-usa.com
1699 Wall St. Suite 210, Mt. Prospect, IL 60056

自分とは、あってなきがごとき存在になってしまう。求めても得られない孤独と諦観の中で、『成功体験』は自分が認められるという『快感』を与えてくれた。

自分の存在が人に認められてもらえる快感は、それまで親から肯定的スローク(その人の存在を認める働きかけ)を得られずスローク飢餓に陥っていたとすれば、『周りの人間関係すら崩壊させても』欲しいと思えたのではないだろうか。

スロークに飢えた人間は、ゲームを仕掛ける。普段、構ってもらえない子供がいたずらしてわざと怒られるように、無視されるよりも、怒られてでもいいから感情の交流が欲しいのである。それがマイナスのスローク(まずい食べ物)であれ、スロークゼロ(飢餓)よりはましなのだ。

彼は、自分を認めてもらうために「マネーゲーム」に突っ走った。彼にとって、経営ははなから二の次だったのだからかもしれない。

自分を認めてもらうこと

—そのために会社はあった。

その名も「Livedoor」

—まさに、彼が“生きていくための入り口”だった。

そして、世界一になる。その時彼は、世界中から認知される。彼は賭けたのかもしれない。その時、『変わらないもの』がこの手に入るだろうか。

しかし、心の底では気づいていたはずだ。親の無償の愛情に代わるものは、『今のところありそうにない』ことを。

(3)生きるための入り口

(livedoor)は、そこにある

私は、またも「少年A」を思い出してしまった。生まれた時からトレーニング(しつけ)が優先し、親から愛を得られなかった「少年A」もまた、スロークの飢えを満たすため、自分の存在を認めさせるため、破滅的な「殺人ゲーム」を仕掛けた。「少年A」を「堀江貴文」に、「殺人ゲーム」を「マネーゲーム」に置き換えても、そっくりそのまま当てはまる。

なぜ、最後は破滅に向かうのか。求めても求めても心が満たされないからである。心の空洞は、お金やモノでは決して埋められない。埋められないから、さらに大きなもので埋めようとする。親から得られなかった自分ときちんと向き合っている欲しいという欲求は、やがて社会に向けられるようになる。心の空洞をゴミで埋めようとして埋められず、やがて社会が対応せざるを得なくなるのと同じだ。最後には、「少年A」の場合は「警察」が、「堀江貴文」の場合は「特捜」が対せざるを得なかった。

欲求が満足されず行動が加速していくことを、家族療法ではエスカレーションという。そのエスカレーションを止めることができるのは、唯一愛情しかないのだ。

もう一つ感じたこと。私はどこから来てどこへ行くのか—人は誰しも、そういう根源的不安の只中に生きている。

人間にとっての始点は親。そこから人生がスタートする。終点(ゴール)は自分がどのような存在としてこの社会に立つかというビジョン。だから、自分(個性)を知ることが大切に

なる。始点と終点、この2つが揃うことによりベクトルが定まり人生は安定する。

始点が与えられなければ、人生の方向を定めることができない。始まりがなければ、終わりも見えない。生き方は、刹那的になっていく。堀江氏が場当たり的だったのは他に方法論がなかったからだと思う。

彼は、簡単には罪を認めないだろう。『変わらないもの』をとりあえず「金」におき、それを得ることで自分を「認知」させ、その名前によってさらに金を得る。生きるための入り口(ポータル)「Livedoor」。そこを通じて「金」と「認知」を得ることが、彼の自転車操業的「生」そのものであったから。

本来は、法に触れない範囲でその2つを追求したかっただろう。しかし、追求すればするほど飢えは深刻になる。ひもじければなんでもしてしまうのが人間だ。あと3年で世界一になろうと言っていた彼は、世界を相手にしなければならぬほど心の空洞が広がり、もうギリギリのところまで追い詰められていたのかもしれない。「ライブドア」をどんなに巨大にしようとも始点は見つからない。その焦燥が彼を追い詰めていったのではないだろうか。

「一体、おれは誰なんだ！」という叫びが聞こえる気がする。

彼がくずおれた時、救うことができるのは親しかいない。一から出直せとはっばをかけるのではなく、ただ受け入れ抱きしめてあげることだ。「おまえ(あなた)は、私たちの子どもだ(よ)」と。

そこで彼は、初めて始点に立つことができる。そう、親が本当の「Livedoor」(生きるための入り口)なのだ。そこから、本当の人生が始まる。

(中尾英司)

■著者紹介■

中尾英司 (家族相談士・シニア産業カウンセラー)

電話相談、メールカウンセリング、及び月2回ほど全国各地のご家庭を訪問してご家族の問題解決に当たっている家族カウンセラー。子育ての問題全般、ADHD、不登校、窃盗癖、ギャンブル依存、統合失調症、DV、離婚、会社のセクハラ・パワハラ対応、会社との共依存、転職の問題などを手がけている。講演依頼.COMの講師として、組織改革や子育ての心理についての講演やセミナーも行う。

著作:「あきらめの壁をぶち破った人々」(日本経済新聞社 03/11)

「あなたの子どもを加害者にしないために」(生活情報センター 05/08)

サイト:「中尾相談室」、「組織改革支援.COM」

ブログ:「あなたの子どもを加害者にしないために」



アメリカで家を買う・売る・投資する!

初めてのマイホーム・マイコンド、雇用ビザでの不動産購入・投資
その他あらゆる不動産売買に関する基礎知識・ご相談、情報提供
をさせて頂いております。信頼あるリマックスで、経験と知識豊富な、
私達エージェントに是非お任せください。(ジェリー)



RE/MAX MARKET

不動産エージェント/ Jerry Grodesky

TEL: (847)-640-9676 (Pavilion日本語サービス)

物件リスト: www.searchhomemarket.com